

目標だったマッターホルン(4,478m)に登頂

大阪ぼっぼ会 細井裕子

プロローグ

仕事を通じて知り合った登山ガイドのOさん。私の体力を知っていて、会うたびに、「マッターホルンに登るなら、体力のある今のうちだよ」と言う。もともと海外の山にはそんなに執着はなかったが、繰り返し言われると不思議なもので、行かなきゃいけない気になってくる。とはいえ行こうと思いついてすぐに行けるところでもない。踏ん切りがつかないまま時間が過ぎていったが、去年ふと「このままではいけない」と一念発起。同行者を募り、諸先輩にトレの仕方などを聞いて情報収集をした。同じ会のII島さんが同行メンバーと決まり、彼女の仕事の休暇申請が許可され飛行機を予約すると、もう後戻りできなくなった。

一にも二にも体力が大事というマッターホルン。2人でトレーニング山行とは別に、体力強化のため、ボッカヤランに取り組んだ。好日山荘の低酸素トレも3回受け、高度障害へも備えた。そしてあっという間に出立の日となった。

旅の行程

8/19 日本出発 香港でのトランジットでスイスへ

8/20 早朝ツェルマット到着 ツェルマットガイド協会で試験山行の申し込み等手続き

8/21 グレッシャー・パラダイス(3817m)へ。高所順応。

下山後 3090mのゴルナーグラートへ。そこからリッフェルアルプへハイキング (約4時間)

8/22 ガイド試験でPollux(4092m)へ。行程約5時間。ツェルマットガイド協会でマッターホルンガイドの申し込み等手続き

8/23 エア・ツェルマットで山岳保険の手続き。その後ヘルンリヒュッテへ。夜ガイドとミーティング

8/24 マッターホルン登頂。ほぼ最終のロープウェイで下山

8/25 休養日&移動日。グリンデルワルトへ。街を散策

8/26 フィルストへ。下山後氷河が作った溪谷グレッチャーシュルフトへ

8/27 メンリッヘンからクライネシャイデック、ヴェンゲンへハイキング (約4時間)

8/28 日本へ向けて出立

8/29 帰国

初めての海外山旅で予定の立て方が分からなかったが、カラクルンの林さんにアドバイスをもらい、登頂の日を8月24日と決めた。登頂後は「アイガーを見たい」というII島さんのリクエストで、アイガーの麓の街、グリンデルワルトへ行くことに。とはいえ、マッターホルンの登頂日は、予約した日の2日前に天候確認のうえ決定される。つまりは大幅な予定変更も

ありうるのだ。「山では晴れ女」の私だが、この説は海外でも通用するのか？

結果は「YES」だった。20日に大粒の雨が降った以外は連日晴天。試験山行の日も本番の日もほぼ無風。スケジュールは予定通りこなしていった。運も実力のうち。天が味方してくれている。それだけで、半分は成功だ。これはいける！ そう確信した。

私、何か「もっている」かもしれない。

アタック前日 8/23

ここからは、マッターホルン登頂のみにしぼって書くことにする。

ツェルマットの街で昼ご飯のサンドイッチを調達し、シュヴァルツゼー行きのロープウェイに乗る。このロープウェイに乗るのも3度目、通いなれた道。この日は標高 2,583mの駅から標高 3,260mのヘルンリ小屋までの、ゆっくり行っても3時間のハイキングコース。ガイドとの待ち合わせは18時半だから、のんびり歩いていけばいい。



マッターホルンを望める絶景スポットの湖畔でランチタイム。明らかに観光客の日本人が記念撮影するのを横目に、「私たちはあの凄い山にこれから登るんだよ～」と心のなかで呟く。

30分ほど休憩して歩きだす。途中すれ違った人が、「Matterhorn、Yeh!!」と叫びガッツポーズしている。登れた歓喜の雄叫びなんだろうなあと見ていると、今度は、今からヘルンリ小屋に行こうとする若者に降りてきた人が、「もう、すごい人だよ。全然進まないんだ」など熱っぽく語っている。この井戸端会議風情報交換の光景は至るところで見られて、それがドイツ語だったりフランス語だったり英語だったり、国際色豊かで面白かった。

3時間もかからずヘルンリ小屋に到着。受付で当日のガイドの名前を聞く。前情報から、私はガイド協会に手続きに行った時に、「あなたのガイドだよ」と紹介されて顔合わせ&軽く打ち合わせでもするのだと思っていたのだが、ガイド協会は私の担当ガイドが誰か把握しておらず、小屋で訊くように、ということだった。持ち物と待ち合わせ時間などを受付のお姉さんが簡単に説明してくれたのみで打ち合わせもない。どんな人が担当になるかは、この日初めて分かるわけで、ドキドキである。

18時半まで時間があるので、ゆっくり小屋を見学。ネット情報では、トイレは垂れ流しだとか、外でテントを張っている人がいるが黙認されているなどとあったが、トイレは水洗だし、小屋内はとても綺麗。テントを張っている人もいない。数年前に小屋が立て替えられたようなので、そのときに綺麗になったのだろう。個室も2段ベッドが3つある6人部屋で、雑魚寝ではない。一番乗りの私たちは下のベッドを取った。幸い、上には誰も来なかった。

明日の出発は夜明け前の暗いうちなので、今日中に取りつきをみたいと思っていたが、私たちが到着した直後から大粒の雨が降ってきた。食堂でケーキを食べてやり過ごしていると1時間も立たずに止んだ。小屋備え付けのクロックスのまま外へ出て取付き方面へ歩く。10分ほどで取付き到着。そこから岩壁がそそり立っているが太いFIXロープと、ホッチキス状の持ち手

がついている。登りやすそう、そういう実感が持てた。見に行ってもよかった。

小屋に戻り、図書スペースからマッターホルンの写真集を取ってきて2人で見た。この本、ノーマルルートの様子が事細かに写真で説明してある。クライミングレベル的には3級程度？さして難しくなさそう。問題は山頂付近の雪のつき具合だけだが、ここ数日の晴天続きで幾分溶けていそう。そう分かれると「行ける！」感覚が湧いてきて、にわかに緊張感が解けた。

18時半になり食堂に行くと、先にII島さんのガイドが来た。剽軽なキャラの比較的若いガイド。名前は3回聞いたが全く聞き取れなかった。そのあと私のガイドが来た。ペーターという、少しベテランっぽい人。同室の東欧から来た女性とそのガイドの計6人で夕食を取る。ペーターの雰囲気を観察する私。なんとか上手くやっていけそう。

食事が終わると「装備を見せて」と言われ、3人とも部屋に移動する。チェックされたものはヘッ電(明るさも)、手袋、服。II島さんはアイゼンの爪が尖っているかも見られたと言っていた。ピッケルは不要と言われ、ザックに入れたのはアイゼン、水(1.5ℓ)、上で使う厚手の手袋、貴重品のみ。ちなみに私たち、水はスポーツ飲料にしたが、ほかの国の人、小屋を出してくれるルイボスティーを水筒に入れていた。行動食はリュックに入れては食べられないと思い、服とザックのウエストベルトポケットに詰め込む。要らない荷物類は一つにまとめて小屋一階にある荷物置き場の棚へ。こうして準備は整い、21時には就寝した。

アタック当日 8/24

4時前に起きる。4時40分に準備を整えて1階ロビーへ。朝食は食べたと思うが、緊張のためかほぼ記憶にない。出発は4時50分以降と決まっていて、暗がりの中待つ。II島さんはだいぶ前に並んでいるようで視界に入らない。4時50分、小屋のドアが開いた。いよいよだ。拳を握りしめて気合を入れる。

出だしは直登し、少しトラバースする。カラビナをかけているから外して登ってくるようにとペーター。なんとなく指示は理解できる。

暗がりの中登った部分はどんなルートだったかほぼ記憶にない。ただ、ヘッ電が明るすぎるとペーターに怒られたのは記憶にある。ただ明るすぎてもダメなんだ！

朝日が昇り、ペーターが珍しく休憩時間を取った。スイスのガイドは全く休憩時間を取ってくれないと聞いていたので驚きつつ、ここぞとばかりに写真を撮った。途中のソルベ小屋(標高4,000m)までは3時間内に着いてないと降りろと言われるから、とにかくそこまでは必死に登れと聞いていた私は拍子抜け。私の遅いペースに合わせているのかよく分からないが、ペーターのペースはかなりゆっくり。おかげで私は登りを楽しむ余裕があった。

途中少し難しいクライミングが求められる箇所があり、ペーターがかけたカラビナを、出だしと同じように外したら、ペーターから「No!!!!!!」と怒りの声が飛んできた。聞くと、「俺を殺す気か！」と言っている。どうもそのカラビナは、ペーターの確保のためにかけたものだったのだが、説明がなくシステムも分からないんだから、怒られるなんてちょっと理不尽である。さらに、呼吸が早くなっている私を「困ったね」みたいな顔で一瞥したり、「君はそんなに

早くないね」と言ってきたり。もしかしてソルベイ小屋で降ろされるのか、でもまだ2時間半も経ってないよ、とハラハラしていたが、何事もなくソルベイ小屋通過。

しばらく歩いて、アイゼンを付けるよう指示される。これも急いで付けたのに、ペーターはまだ水を飲んでゆったり、アイゼンを取り出してもいなかった。全く納得いかない。

上は雪が付いていたが凍結もしていないので快適に歩いていける。そうするとFIXロープが出てきた。山頂直下のFIXは80mくらいあって、ごぼうで登るから腕力勝負だよとOさんが言っていた。これのことか！確かに腕力は必要だが、足の置き方によってはレストできる。もっと大変なことを想像していたので良かった。ロープが太く雪で滑りやすいものの、なんとか腕をパンプさせることなく上がった。これをこなせば山頂は近い。

稜線にあがると、先行者が「Congratulation!」と迎えてくれた。そこで初めて「あ。登れたんだ!」と実感がじわじわ湧いてきて嬉しくなった。山頂で記念写真を撮るとペーターが一言。

「もう雲が湧いてきた。危ないから、1分休憩したら降りるよ」。



そこからが苦痛の連続だった。下りは私が先行。急な雪面や岩場はペーターがローワーダウンで降ろしてくれるのだが、こちらのペースなんて見てないからガンガン降ろされて、至る所に足をぶつけてしまう。岩場をクライムダウンしようとして後ろ向きになると、「前向きに降りろ」と指示が。私はちびっこいので前向きに降りると足が届かなく怖いんだけど、そんなことはお構いなし。そのあとも「俺の言うことが聞けないのか」「だから右だって言ってるだろ」などと

怒られ続ける。長く続く下降と緊張感とペーターの怒りの指示でだんだん疲労度が増し、踏ん張りがきかなくなってきた。ただひたすらに辛い。

山頂から3時間ほどで取付きに戻ってきたが、着いた瞬間涙が出てきて止まらなかった。辛かった下降から解放された安堵感からか、思ったように歩けない自分への不甲斐なさからか、ペーターの愛想なしの態度からなのか良く分からなかったが、嬉し涙ではなかった。「無事に登れたんだよ、頑張ったんだよ」と自分に言い聞かせたら、さらに泣けてきた。

小屋に戻ると、ランチも食べずに待っていたII島さんが迎えてくれた。聞くと彼女はお昼前に下山したそうだ。私より2時間近く早い。さすが若いなあと感心する。自分は体力があるつもりだったが、全然だったなあ、ついついネガティブ思考になってしまう。

ゆっくりする間もなく、出発の時間が迫ってきた。最終ロープウェイに乗ってツェルマットの駅まで降りなければならないのだ。ペーターに登頂証明をもらって写真を撮って、バタバタとヘルンリ小屋を後にした。